6/13

大学当局の収拾策動を粉砕し、学園での告発を大学治安立法粉砕へ

6・15御堂筋占拠に！

大阪市立大学 商学部闘争委員会

6/13

再たび、学園から街頭へ！

―知的ラディカリズムの蜂起を、6/15御堂筋10万人占拠闘争へと押し進めよ！―

全市大の全ての学生、院生、そこで働く教職員諸氏へ、再度、商闘委より訴える。

現在、政府自民党、独占ブルジョワジーは、国会の会期を48日間という長期に亘って延長し、防衛2法案・外国人法（出入国管理法案・外国人学校法案）国家公務員秘密保護法案・健康保健特例法そして大学治安立法と、70年代に於ける、人民のより一層の収奪、市民社会の帝国主義的再編強化を目論み、世界資本主義の危機から脱け出て、延命せんとしている。戦後、ねってはねった位の人民に対する弾圧は、警察国家そのものの登場とそれ支配体制の弱さを自ら露呈した。騒乱罪、破壊活動防止法の適用は、社会危機・政府危機の登場を自ら告げたものであり、裁判所の治安対策的行動と併せ、ブルジョワ法の階級性を明白にした。今、日本国家独占資本主義は、急速に反動化を強めているのだ。ポスト・ベトナムをも取りこむ形で、帝国主義諸国は戦線の無駄を立て直そうとしている時、この70年を防衛革命・アジア反共主義戦線の後路線と戦わずして何としよう。無論、数々の斗争の最大の焦点は、沖縄であり、学園斗争である。

封鎖的な貿易、為替管理体制と日米ドル核同盟によって護られ、人民収奪、社会秩序維持で支えられ、発展してきた、日本資本主義のこの「高度経済成長」は、今や、これらの矛盾すら邪魔になりだした。しかし、所詮、アジアに於てすら、単独盟主になり得るほどの、軍事力、金融力を持たぬ日本資本主義は、アメリカ帝国主義の肩代わりをしながら、未だ依存せざるを得ない。ベトナムでの敗北時、植民地、市場の喪失を意味し、社会主義国の誕生を予見させる時、何としてもせらばならぬアジアの要塞＝沖縄は、72年以降、ますます鋭化している状況をみる時、現在のこの苦しい問いは、以何に重要な知ることはできるであろう。

日本国家独占資本主義は、アジアにおける、政治的、経済的、軍事的盟主たらんとする時、外なる国際危機を国内にまで持ち込まざるを得ず、戦後の"平和と民主主義"という国内支配体系そのものの諸矛盾と、それらを通じて激化させざるを得ない。住宅・交通・亜硫酸ガスなどの企業害等の都市問題、大学問題、"首切り・近代化"問題は、社会不安をより一層深化させている。自民党・民社党による度重なる強行採決は、最早議会を通じてのパクロの時代を終焉させた。何のブルジョワ民主主義手続も踏まず、安保自動延長、沖縄本土なみ返還を彼らは決めこむ時、我々の斗争は、議会政治を守れとか、隙間などでは決してなく、それこそ、右か左かの選択であり、社会不安を惹起させることであり、それを通じて、政治危機を呼び起こす事だ。

67年羽田斗争から、同一水平線上まで、68年学園斗争を戦ってきた全国の学友、偉大な戦士達の斗いは、代々木を乗越え、60年・日韓をのりこえた地平に戦陣をしいた。"学問の自由""大学の自治"は、理至系を初めとして帝国主義者の介入を許した時、残るのは、ただ、古代の化石と、自主規制＝学内弾圧路線であったし、新しい質ともとうとしない早けた教師の戯れ言であった。「全学を挙げて、現象の『反復の法則』としての必然性にしがみつ『こうとする彼らには、解放学はあっても、生に対するパトスはない。まさに「生起する一切のものは成ひるに値する」（ファウスト）を銘記せよ。

全大阪の労働者、学生、市民諸君御堂筋を赤旗とスクラムで埋め尽くせ！。市民社会の隅々から城乱を！

6・15反安保斗争に蜂起せよ！

6・15・正午・大手前公園集会